
why so blue?

ごはんライス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

why so blue?

【Nコード】

N0577L

【作者名】

ごはんライス

【あらすじ】

ポール・マッカートニーの「WHY SO BLUE？」を聴きながら書きました。書きましたが内容と曲はあんまり関係がない。というより、お待たせしました。みなさんの大好きな、ど品ど変態ノベルです。15歳未満の子は読まないようにしてください。ただし、「ぼく、体はちびっこだけど、心はアダルトだい」という頼もしいちびっこは読んでもよろしい。その代わり、警察に通報しないでね。通報したら、逮捕される前に君の家を燃やしに行くよ。いやっばちびっこは読んじゃだめ。アダルトDVDばい描写がある

から。じゃあ、高校生もあかんやん。とはいえ、これノクターンの内容じゃないと思うんだよなあ。どうでしょう。ようわからん。ひとまず、ウメさんから警告がきたらノクターンに移動します。ラインを模索中。。。。

釣りをしている。さっぱり釣れない。もう帰ろうかな。隣でしてる女、むっっちゃ釣ってる。いまいましい。女ごときがちよこざいな。もうめんどくさくなってきたので、釣り道具を片付け始める。

「わあ。何これ」

女が、何かを釣り上げびっくりしてる。何か長いもの。

「ちんこやん、それ！」

「ええええええ」

「うわあ。エロいな。ちんこが釣れたよ！」

「何で????」

オレも何か面白いのが釣れるかなと思い、また始めたら、丸いのが釣れた。

「キンタマやん！」

「すげえな。坊主やったな」

「うん。やったあ。というべきか。てかオレ、坊主じゃなくてたけしです」

「すごいじゃん。たけし」

「えへへへへ。えっへん。おねえさん名前なあに」

「あたし？ 河野夜兎」

一時間くらいして、警官が数人やってきた。

「どうしたんですか。おまわりさん」

「ええ。ここに遺体が沈められたんですよ。犯人が自供しよったんです」

「げ」

オレと夜兎さんは焦った。まさか、あのちんこときんたま。

即席で用意したガスコンロを眺め焦る。もう塩焼きにして食べちゃった！！

「どうしよう。夜兎さん」

「しらばつくれるわよ」

「う、うん」

「警部！ 見つかりました！」

「ようし。引き上げる」

遺体が上に広げられた。

「むう。なんや。これ。ちんことキンタマがなくなつとるぞ」

「ほんとだ」

「魚が食ってしまったのか」

「そうかも」

オレと夜兎さんはこっそり逃げて、車に乗った。オレは歩いてきたから夜兎さんの運転である。

「あははー。最高。笑っちゃうね」

「オレ、怖かったですよ」

「それにしても、ちんこがあんなに旨いもんだつたとは」

夜兎さんがよだれを垂らしオレの股間をにらむ。危ない女だな。まさしく危ない女であつた。余所見をしていたので、電柱に激突。オレは意識を失った。

気がつくと、オレは車で一人でいた。

「むう。夜兎さん。どこ行つたんだ。オレを置いてひどいよ」

置手紙がある。

「なになに。ちんちんもらっちゃつた。ごめん。夜兎。ですと。なにいいいいいいいいいい」

オレはあわてて、パンツの中身を見た。

「な、ない！ー！！」

ちんこがない。あの女。オレのちんこ焼いて食つつもりだ。ちきしょう。

しかし、どこにいるかわからん。車の中を見渡す。携帯が置いてあつた。あわて過ぎて忘れていつたんだ。

オレは夜兎さんに電話してみる。

ぶるるるるるる。

「はい。夜兎でーす」

「もしもし。たけしだよ」

「げ。坊主」

「夜兎さん。オレのちんこ返してよ」

「それがそのう」

「まさか、もう食べちゃったの!」

「ううん。まだ。でも食べたいなあ。デミグラスソースとからめると旨いと思うのよ。どう?」

「料理法なんて聞いてないよ! 夜兎さん、今どこにいるの」

「家」

「すぐ行く!」

オレは夜兎さんに住所を教えてもらい、車から出て走った。

「はあはあ。無事でいてくれよ。オレのちんこ」

夜兎さんのアパートに到着。

「ああ。何か股間が妙に熱い。まさかあの女焼いてるんじゃない!」

オレは階段を一足飛びして、夜兎さんの部屋のドアを蹴飛ばし開けた。

「けむり。むう。やはり」

「げ。早かったな。たけし」

「おのれ。夜兎さん!」

オレはフライパンからちんこを取った。

「あつつ」

放り投げた。夜兎さんがキャッチ。

「あのさあ。思ったんだけど、これって小さいねえ。勃起したバーションないの」

「ないのって。しごけば大きくなるよ。てか、返して」

夜兎さんはやはり、オレのちんこをしごしご上下に激しくしごいた。

「あっあっ気持ちいい」

オレは股間に猛烈な快樂が走った。

「わ。本当に大きくなってきた」

「わ。わ。わ。もうだめ。いく」

「わっ」

夜兎さんの顔にどぴゅつと精液がかかった。

「うわああ。濃い。あんた。相当たまってたんやねえ」

「夜兎さん。返してよう」

「あ。精液出たらまたしぼんできた」

「返してよう。返してよう。うわああああああん」

夜兎さんは今度はオレのちんこをなめ始めた。

「あ。あ。気持ちいい。だめ。気持ちいい」

激しくなめる。

「今度は精液が出る前に、フライパンに入れないと」

最大限にふくれあがるオレのちんこ。夜兎さんは激しくなめ続ける。

「あ。いく」

「ちよつと待て」

夜兎さんはえいとフライパンにちんこを叩きつけた。

「あ、あづいいいいいいいい」

オレはもういいかげんにキレた。夜兎さんにタックルし、Ｔシャツを脱がせ、おっぱいを二個、えいともぎとった。

「あ。あたしのおっぱい、とったな」

「うるさい。ちんこ返してくれなきゃ、おっぱい返さないよ」

「うぬうう」

夜兎さんはひとまず、フライパンからちんこを出した。

「ほれ。返すから返しな」

「ちんこから手を離して」

「お前こそおっぱい離せ」

オレは夜兎さんの乳首を吸った。

「いやん！」

夜兎さんは感じてしまい、ちんこを落とした。

「チャンス！」

オレはちんこを拾った。

「へっへっへ。ざまーみろ」

「あたしのおっぱい返せよ！」

「やだねー散々ひどい目にあったからこれは慰謝料としてもらって
く」

「なにい」

オレは股間にちんこを装着し、おっぱいを両脇に抱え、走った。
追いかけてくる夜兎さん。

オレはドアを蹴飛ばして外に飛び出した。

階段を急いで下りようとしたら、夜兎さんがオレの頭に向かって
フライパンを投げた。命中。

「うぎゃ」

オレはおっぱいを放り出してしまった。

放り出されたおっぱいは、一個はちょうど走っていたトラックの
荷台に着地。

「わあ。新潟行きやん」

もう一個はアスファルトに着地。

「おのれ。一個でも助かった」

と思ったら野良犬が来て、おっぱいをくわえた。

「あっこの野良公。返しな」

夜兎さんが追いかけると、おっぱいをくわえた野良犬は逃げる。

「はあ。はあ。はあ」

夜兎さんが止まると犬も止まる。

「あ。あんた。返せ！」

夜兎さんが走ると野良犬も走る。

わんちゃん、完全に夜兎さんが遊んでくれていると思ってる。

「こっちは夜兎さんに任せ」

オレは携帯で電話した。

「やあ。じい。至急、ヘリコプターをチャーターしてくれ」

「かしこまりました。ぼっちゃん」

しばらくしてヘリが到着し、オレは乗り込む。

今から新潟行きのトラックを追跡するのだ。運ちゃんが夜兔さんのおっぱいを肉まんと勘違いして食べちまう前に。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0577l/>

why so blue?

2010年10月8日14時40分発行